

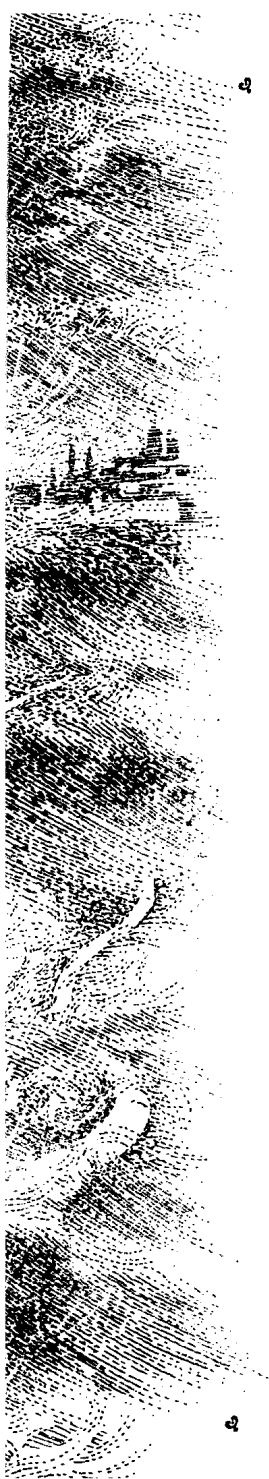
Ludwig Tieck 深見茂・鈴木潔…他 訳

テューク



国書刊行会

ドイツ・ロマン派全集……………〔第一巻〕

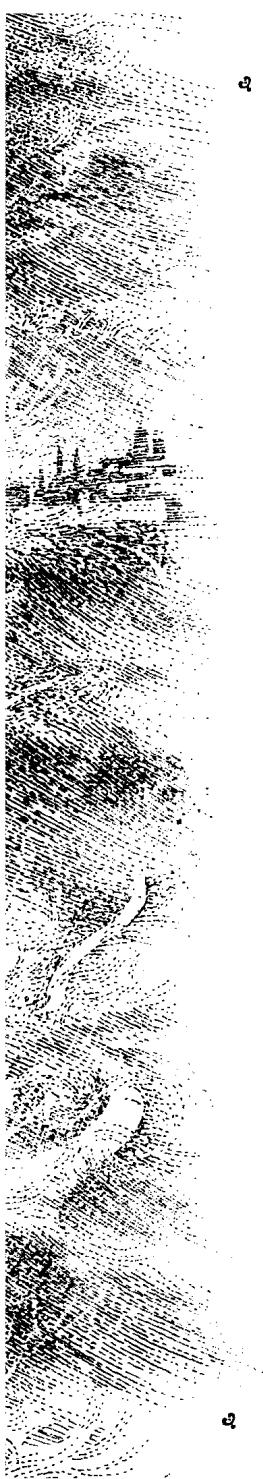


テイク……………深見茂十鈴木潔他 Ⅱ 訳

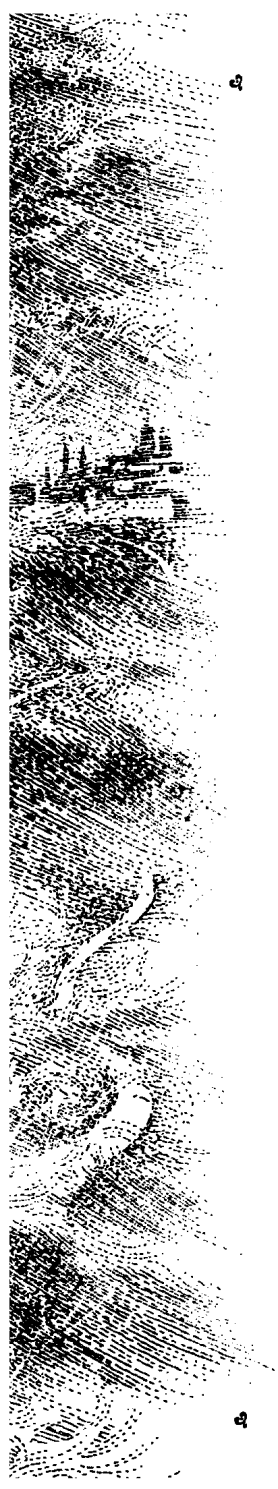


目次

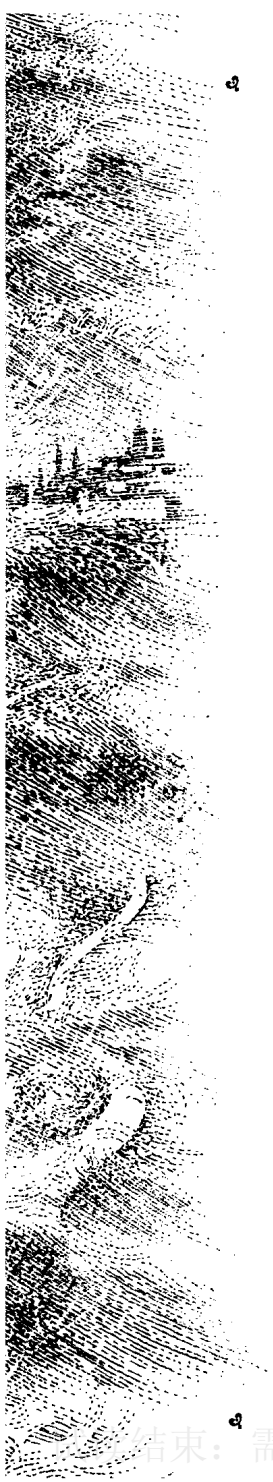
9	金髪のエックベルト……………前川道介 Ⅱ 訳
33	友だち……………深見茂 Ⅱ 訳
53	ルーネンベルク……………鈴木潔 Ⅱ 訳
81	愛の魔法……………今泉文子 Ⅱ 訳
121	妖精……………菌田宗人 Ⅱ 訳
147	怪しのさかずき……………深見茂 Ⅱ 訳
169	美しいマゲローネ……………佐藤恵三 Ⅱ 訳
245	ハイモンの子らの物語……………深見茂 Ⅱ 訳
303	忠臣エックルトとタンネンホイザー……………鈴木潔 Ⅱ 訳
351	解説……………鈴木潔



Ludwig Tieck.....ルートヴィヒ・ティーク



金髪のエックベルト……………前川道介 訳



ハールツのある地方に、ふだん金髪のエックベルトという通り名で呼ばれる騎士が住んでいた。年の頃は四十歳ぐらい、背丈はまず中位で、短く切られてびったりとなでつけられた淡い色の金髪が、あおぎめてやつれた顔を縁取っていた。この男はいたって静かに暮しており、隣人の争いに巻き込まれたことはなく、自分の小さな館をかこむ壁の外に出ることは滅多になかった。彼の妻も夫と同じように非常に孤独を愛し、夫婦仲はきわめていように見受けられたが、二人はいつも子宝が授からないことを嘆いていた。

エックベルトを訪れる客は滅多になかった。たとえあつても、日常生活のペースはほとんど変らなかつた。彼の家では何事にもほどのよきを守り、つましさを基調としていらしなかつた。エックベルトは客があると明るく上機嫌だったが、ひとりぼっちでいるときは、いくぶん内向的になり、むつつり引っ込みがちな憂鬱症になることに、人々は気づいていた。

この館をしげしげ訪れて来るほとんど唯一の客はフィリップ・ワルターだった。エックベルトはこの人物が自分がいちばん好む考え方とほぼ同じ考え方をすることを知って、仲よくしていたのである。ワルターはもともとフランケン地方に住んでいたのだが、半年以上もエックベルトの館の近くに滞在することがよくあつて、菓草と鉱物とを集め、整理分類していた。彼にはちょっととした財産があつて、誰の世話にもならず暮していた。エックベルトはよくワルターと連れだつて、二人だけで散歩をした。こうして年とともに二人の友情はふかまつていった。

人間というものは、それまで注意深く隠してきた秘密を友人に対して隠しつづねばならなくなると、何となく不安になり、何もかも打ち明けてしまいたい、その友人に心の底まで開いてみせたい、そしてそれだけ真の友人になつてもらいたいというどうしようもない衝動を感じるものである。そんなとき相手の真情が分つてほろりとさせられることもあるし、またそんな相手と知り合つたことを恐ろしく思うこともあるだろう。

エックベルトが友のワルター及び妻のベルタとある霧深い夕刻、暖炉を囲んで坐つていたとき、季節はもう秋

になっていた。焔は部屋中に明るい光を投げ、天井にちらちらと反射していた。夜の闇が窓からのぞいて、戸外の本々は湿っぽい冷気に身震いしていた。ワルターがこれから長い道のりを帰らねばならないことを嘆くと、エックベルトは、うちに泊って夜もふけるまで楽しくお喋りをしてから、一室で夜が明けるまで寝ていくようにすすめ、ワルターはそれを承けた。そこでワインと食事がはこばれ、暖炉には薪がさかんにくべられて、二人の友の話はますます陽気に親密になっていった。

食事がさげられ、下男たちが引きさがってしまつと、エックベルトは友の手をとつて、「ねえ、きみ、一度妻の若い頃の話を書いてくれないか。実に珍しい話だから」と言った。——「よろこんで」とワルターは答え、三人はまた暖炉のまわりに坐つた。

ちょうど真夜中になつた頃で、月が吹き流れていく雲の間からときどき顔をのぞかせていた。「どうか出すぎた女とお思ひになりませんように」とベルトは語りはじめた。「夫は、ワルターさまは高潔なお人柄だから、何事でも隠しごとをするのは、よくないと申しております。ただわたしの話がどんなに奇妙に聞こえても、つくり話だと思ひになりませんように」

わたしはある村で生まれました。父は貧しい羊飼いでした。家の暮しむきはかなり苦しく、どうすればその日のパンがいただけるか分らないことがよくありました。だがそのことよりわたしの心を悲しませたのは、よく父と母とが貧しさのために争い、はげしく相手を非難することでした。そのうえ、わたしはしょっちゅう、お前はちよつとした仕事もできない愚かな子だと怒られていました。またじっさい、わたしはひどく不器用で頼りのな

い子で、手にもったものは何でもおとし、お針も糸紡ぎも覚えられず、家計を助けることは何ひとつできませんでした。それでも両親が暮しに困っていることは、分りすぎるほど分っているのです。そうしたとき、わたしはよく片隅に坐って、とつぜん金持ちになったら、どういふふうにして両親を助けようかとか、金貨や銀貨をどっさりあげて、二人がびっくりするのを見て、いい気持になりたいとかいふことを一心に考えていました。すると地下の宝物を教えてくれたり、寶石に変る小石をくれたりする妖精がふわふわと飛んで来るのが見えるのです。つまりわたしは腰を上げて、何か手伝いをしたり、ものをほこんだりしなければならぬときに、こんな途方もない空想にふけつていたわけで、ますます動作が不器用になってしまふのでした。頭が奇妙な空想で、ぐらぐらしていたからです。

父はわたしがお家にとって役立たずのお荷物であることにいつも腹を立てていました。それでときにかなりむごく扱われることはあつても、父からやさしい言葉をかけてもらったことは滅多にありませんでした。こうして八歳近くになったとき、父はこんどは本気になって、わたしに何かをさせるか、何かを学ばせようということになりました。わたしが何もしないでぶらぶらしながら日を送っているのは、わがままでなまけものだからだと、父は考えていたのです。それはとにかく、父はわたしを口では言えないほどおどしつけました。それでも全然効き目がないものですから、むごい折檻せうかんをくわえ、お前というやつはしょうがない穀ぐつぶしだから、毎日、毎日こうした罰をくわえてやると言うのでした。

わたしは夜どおしはげしく泣きました。自分がひどく寄るべのない身に思われ、われとわが身がかわいそうになり、いっそ死んでしまいたいとまで思いつめたほどでした。夜が明けるのがこわく、どうしたらいいのかわりません。あれこれの器用さが身につけばなあと思ひ、自分がなぜよその子たちにくらべておろかなのか、そのわけがどうしても分らず、もう絶望的な気持になりました。

夜が明けかかったとき、わたしは起き上がって、ほとんど無意識のうちに両親と住んでいた小さな家の戸口を

開けました。そして広々とした野原に出、やがてまだ日の光がさし込んでいない森の中に入っていました。あとをふりかえりもせず、せつせと歩きつづけましたが、まったく疲れは感じませんでした。というのは、この程度ではまだ父に追いつかれるだろう、そして父はわたしの逃亡に腹を立て、いままでもっとひどく折檻するだろうと信じていたからです。

再び森から外へ出たとき、太陽はかなり高くのぼっていて、目の前に濃い霧でつまれた何か黒いものが横たわっているのが見えました。わたしは丘を越えたり、岩の間を曲りくねっている道をたどったりしなければなりません。それできっと近くの山の中にいるのにちがいないと思い、ひとりぼっちでいるのが、急にこわくなくなりました。というのは、わたしは平野で育ちましたから、まだ山を見たことはなく、山という言葉を入話しているのを聞くだけで、わたしのおさない耳にその言葉がいかに恐ろしく響いていたからです。しかしひきかえず勇氣もなく、不安に駆られて、先へ先へと進みました。風が頭上高く木々の間を吹き抜けていくたびに、あるいは朝のしじまをぬって木を伐採する音が響くたびに、わたしはぎょっとしてあたりを見廻すのでした。そのうちようやく炭焼きや坑夫に出会って異様な言葉で話をしているのを聞いたときには、びっくりしてしまっ、あやうく気を失うところでした。

飢えと渴きのため物乞いをしながら、いくつかの村を通りすぎました。人から事情をたずねられるたびに、何とかうまく答えて、切り抜けることができました。こうして四日ほど進んでから小さな道に入り込みました。そのため大きな道からだんだん遠ざかっていき、あたりの岩はいまままでのものよりずっとかわった恰好になってき



ました。累々かさねと積み重なった断崖で、突風が吹いたら最後、ばらばらになりそうな恰好をしていました。このまま進んでいいか、どうか分りませんでした。それまでは夜は森の中か、人里離れた羊飼いの小屋で寝ておりました。ちょうど季節が一年中でいちばんいい季節だったからです。だがもうこの辺になると、人家に一軒も出会わず、こんなに荒れはてたところでそんなものにめぐりあえるなどは到底期待できませんでした。岩はいよいよ恐ろしくなり、しばしば目まいのするような深淵すれすれのところを通らねばなりませんでした。そのあげくが道がなくなる始末で、わたしは絶望のあまり、泣きわめきました。するとその声が溪谷の絶壁にあたってものすごい音で反響してくるのでした。いよいよ夜がせまってまいりましたので、苔の生えている場所を探して休むことにしました。その夜は眠れないで、いろいろな奇妙な音を聞きました。野獣の吠える声かと疑ったこともあり、岩の間を吹きぬける風の悲鳴かと思ったり、あるいはまた珍しい鳥の声かと思ったりもありました。わたしは神に祈り、明け方になって、ようやく眠ることができました。

顔に日の光があたって、やっと目がさめました。目の前にはけわしい岩がそそり立っています。そこへ登ったらこの荒れた土地から抜けだす道が見つかるのではないか、またひょっとしたら人家か人のすがたが見えるかも知れないという希望を抱いて、よじ登ってみました。しかし頂上に立ってみますと、目のとどくかぎりどこも同じことで、すべてが霧のようなものでおおわれていました。どんより曇った日で、木も牧草地も茂みも目に映らず、見えるのは岩の狭い裂け目からさびしうに悲しげに生えている幾本かの灌木だけでした。あとでこわくなくてその人から逃げだすことになるにしても、とにかく人の顔が見たいというぐらい、はげしい人恋しきにとり憑かれました。それと同時に苦しいほどの空腹を感じて腰をおろし、死ぬ覚悟をしました。しかししばらくすると、また生きようという気持のほうに勝って、いきなり立ち上がると、涙を流し、溜息をつきながら、一日中歩きつづけました。しまいにはほとんど意識がなくなり、疲れきって、これ以上生きていたいと思わなくなりながらも、やはり死ぬのがいやだったのです。

夕方近くなると、周囲の風景がすこしやさしくなり、考える力や希望がまたよみがえって、生きようという気が体中の血管にめぐりまわりました。遠くから水車の廻る音が聞こえてきたように思い、足を速めてとうとう荒々しい岩場が尽きるところまで来たとき、どんなにほっとしたことでしょう。遠くに美しい山を背景にして森や牧草地が再び眼前にひろがっています。もうまるで地獄から天国へ来たような気持で、ひとりぼっちで寄るべのない身であることが、いまはまったく恐ろしくなくなりました。

ところが行きついてみると、あてにしていた水車小屋とはちがひ、滝だったので、随分がっかりしたことは言うまでもないことです。小川から水を手ですくって一口飲んだとき、とつぜん、ちよつと離れたところで軽い咳がしたように思いました。かつてこんなうれしい不意打ちをくったことはありません。近づいて行くと、森のへりに休んでいるらしい一人の老婆のすがたが目につきました。ほとんど黒ずくめの服をきて、黒い頭布が顔と顔の大半をおおい隠していて、手には松葉杖をもっていました。

わたしは近づいて行って、助けてほしいと頼みました。すると横に坐らせて、パンとぶどう酒を少々わけてくれました。わたしが食べている間、老婆はかなきり声で賛美歌を歌っていましたが、歌いおわると、ついでくるように言いました。

その声と人柄が何とも奇妙に思えたのですが、この申し出はたいへん嬉しく思われました。老婆は松葉杖をついているにもかかわらず、かなり速く歩きましたが、歩くたびにひどく顔をしかめるので、最初のうちは笑わずにはおられませんでした。荒々しい岩場はしだいに遠ざかり、心地よい牧草地を越えてから、かなり大きな森を

